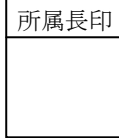


(特研様式5)



早稲田大学総長 殿

2009年 5月 14日

所 属 国際学院
資 格 教授
氏 名 益子真由美 印

特別研究期間研究成果報告書

1. 研究課題：敬語表現やコロケーションを中心としたコンテキストの研究
2. 研究期間：2007年9月26日 ～ 2009年3月31日
3. 研究場所（国/都市・機関名）：英国／ケンブリッジ・University of Cambridge
4. 研究成果概要（2,000字以内）：

今回の特別研究期間では、言語理論の中で敬語表現が占める位置について再考した。日本語のように敬語表現が体系化されている言語では、それらの表現の形態的特徴を押さえた上で統語的規則を記述するのは最低限である。最も困難な課題は統語的規則に加えて、表現の受容度に影響を与えるコンテキスト（文脈）をどのように記述するか、更に、それらの要素を加えることによって言語理論全体の形がどう変化するのかを説明することであることは自明であると思われる。

University of Cambridge の自然言語処理の研究者である Dr Ann Copestake は、より自然な言語表現の理解・生成のためにコンテキストを含む語用論的概念をどう扱うべきかの研究を行ってきた。最近では英語やギリシア語のポライトネスについて依頼表現を中心に、どういった文法素性を仮定して理論を構築すると、より自然かつ文法的にも問題のない表現となるのかといった研究を行ってきた。今回、Dr Copestake と討議を重ねた結果、2つの大きな問題があることを再認識した。まず、各言語のポライトネスを表す表現や、その使い分けを可能な限り正確かつ包括的に記述することの重要性である。これはあまりにも当然との印象を与えるかも知れないが、例えば日本語における多重敬語の受容度の歴史的変遷を考慮すれば、特定の時点で「望ましい」敬語表現の記述が容易ではないことは理解出来るのではないだろうか。更に包括的な研究を行うためには、方言間での違いや個人による受容度の判断のブレといった面も加わることになる。もう一つの問題は、正確かつ包括的な記述が達成されたとしても、言語間の違いが余りにも大きいため、特定の表現について、もしくは特定の目的に使われる表現について、の言語間の相対関係はある程度まで説明可能であるが、全ての表現についての包括的記述や、何故そういった違いが生じたのかの説明はほぼ不可能であろうということである。

2008年の7月にハンガリーのブダペストで行われた The Fourth International Symposium on Politeness では、多重敬語の受容度の歴史的変遷は「視点」という概念を用いることによって説明出来るといった中間的結果の発表を行った。他の発表から、より正確な理論構築を行うためには大量の言語データが必要であるが、実際の発話は場面を中心としたコンテキストが及ぼす影響が大きいため、例えば店員と客との会話といった場面に限定した理論の構築はある程度可能でも、日本語なら日本語 ※研究終了後2ヶ月以内に提出してください。ワープロ原稿の貼付けも可。なお、学術研究活動情報（学術年鑑 Web）のホームページに掲載しますので、電子メールでも研究支援課まで (tokkenseika@list.waseda.jp) ご提出くださるようご協力をお願いします。

